

豊後岡城と鬼ヶ城・木戸の城について

—近世城郭と城下の関係を考える手がかりとして—

はじめに —本論の目的—

これまで筆者は度々豊後岡城を取り上げ、縄張り研究による城館史料学の手法を用いて、近世城郭の遺構そのものが歴史研究の史料として活用できることを示してきた¹⁾。九州は豊臣系新興大名が築いた近世城郭が数多く残る地域である。豊臣政権による九州国分けを契機とする立花山城の大改修や名島城築城にはじまり、朝鮮出兵時には諸大名により肥前名護屋城と陣城群が築かれた。そして、関ヶ原戦後の慶長期には各大名領に居城と共に支城群が整備された。城郭研究者の間では、これらの近世城郭は、虎口編年案による年代観に基づいて文禄・慶長期の様相を示す史料として活用されてきた²⁾。一五九四(文禄三)年に豊臣系新興大名中川氏の大改修を受けた豊後岡城も同時代の史料としての活用が見込まれる城郭跡である。

豊後岡城は、他の事例に比べて城郭全体のみならず台地縁辺の土分屋敷群の遺構まで良好に残ることから史料的价值は極めて高い。既に拙稿において、豊後岡城が一城別郭な曲輪配置と複雑な外柵形虎口を持つ全国的にも珍しい縄張りを持つ近世城郭であること、それが摂津国の国衆を出自とする中川氏の家中編成に起因することを示した。しかしながら、その段階では、城外に広がる土分屋敷群の様相には触れることが出来なかった。

現在、藩政期に編纂された史料群の使用には制約がある。そこで、豊

後岡城の遺構そのものの検証から得られた問題意識をもとに、刊本となつた編纂史料をみたところ、岡城が築かれた上角台地の先端に「上角鬼ヶ城」や「木戸の城」と呼ばれる場所があることに気づいた³⁾。藩政時代の絵図から、前者は上角櫓屋敷と呼ばれて藩士池田氏(後に下石氏)の屋敷になり、後者は藩士村上氏の屋敷になっていたことが確認された⁴⁾。

中西義昌

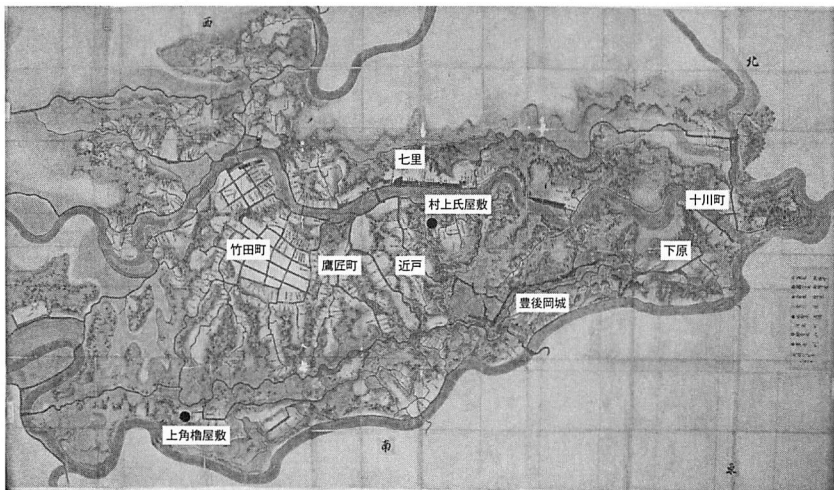


図1 豊後岡城と上角櫓屋敷、村上氏屋敷(木戸の城)の位置関係
《岡城城下家中図》1787(天明7)年 竹田市立図書館蔵 に加筆

現地踏査で縄張り図を作成し検証したところ、それらの土分屋敷は城郭のような形状をしていることがわかった〔図1〕。

そこで、新たに稿を起こして、豊後岡城の城外に構えられた上角鬼ヶ城と木戸の城の事例を紹介することとしたい。これにより、近世城郭と城下の実態を考えるための一視点となる材料を提供する。併せて城郭跡・城下の史跡の保全と活用の一助となれば幸いである。

一、豊後岡城の縄張り構造と特徴について

城外の「鬼ヶ城」や「木戸の城」を検証する前に、まず、豊後岡城そのものの縄張り構造について必要な範囲で再度触れておきたい。なお、主郭(天神山)と東ノ郭、西方外曲輪(西御郭)、及び大手門・近戸門・下原門などの虎口プランを含めた詳細な縄張りの概説やそこから導かれる豊後岡城の縄張り構造の考察については拙稿を参照されたい⁵⁾。

豊後岡城の縄張り〔図2〕をみると、織豊系城郭特有の主郭(天神山)への求心性を備えながらも、外郭ラインで囲まれた下位曲輪に主郭と同等規模の曲輪群が並列する戦国期城郭特有の曲輪配置を有する、二つの異なる性格が確認される。

具体的にみると、城域全体は総石垣の近世城郭の様相を持ち、高石垣と要所に櫓台や横矢掛かりを配して防衛を固めるなど技巧的な織豊系縄張り技術が多用される。特に、主郭(天神山)は本丸を多間櫓・御門櫓で囲み、内枳形虎口(迎撃)と外枳形虎口(出撃)を組み合わせた東西中仕切門を配するなど、軍事的に突出したテクニカルな縄張りを岩山の上に展開する。また、主郭(天神山)を起点にして、東西中仕切門から稜線に沿って石垣・横堀・堀切を組み合わせた堅固な外郭ラインを築き

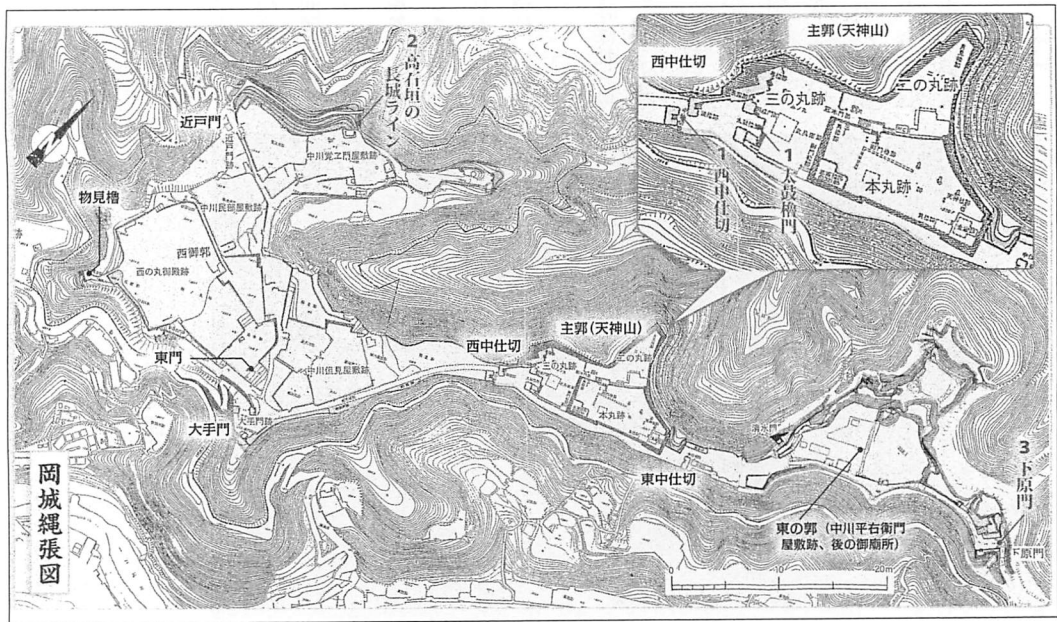


図2 豊後岡城 縄張り図 中西義昌 調査作図
竹田市教育委員会測量図をもとに、調査成果を加えて作図

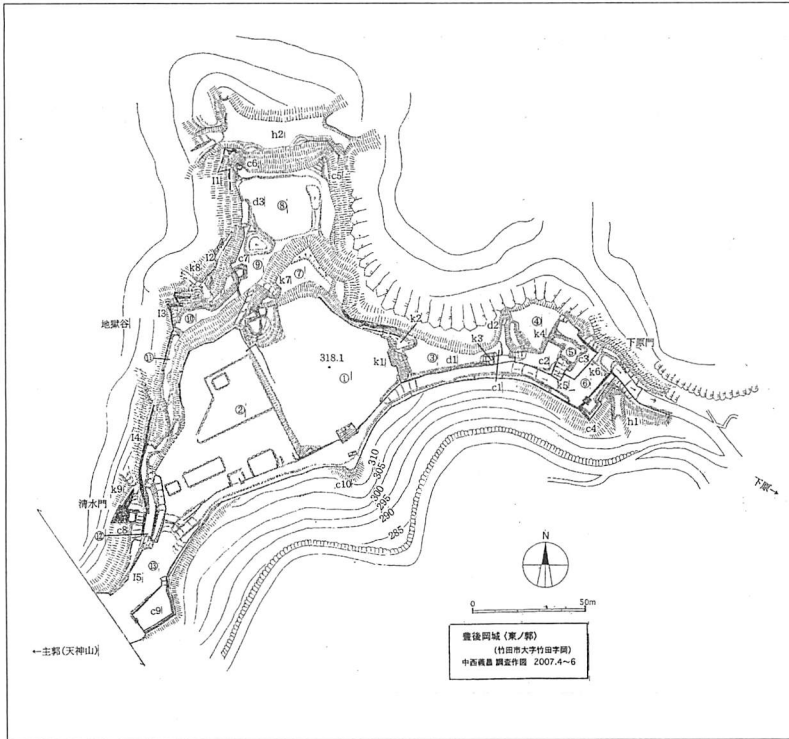


図3-1 豊後岡城(東ノ郭)縄張り図 中西義昌：調査作図

城域を囲い込む。そのライン上に大手門・近戸門・下原門の三口が構えられた。
 その一方で、外郭ラインの内側をみると、東ノ郭や西方外曲輪のように、台地に沿って主郭(天神山)とほぼ同規模かつ比高差もほぼ等しい曲輪群が分布する。これらの曲輪群は主郭からみて下位曲輪となるが、東ノ郭(中川(田近)氏屋敷)は単独で技巧的な虎口プランを持つなど

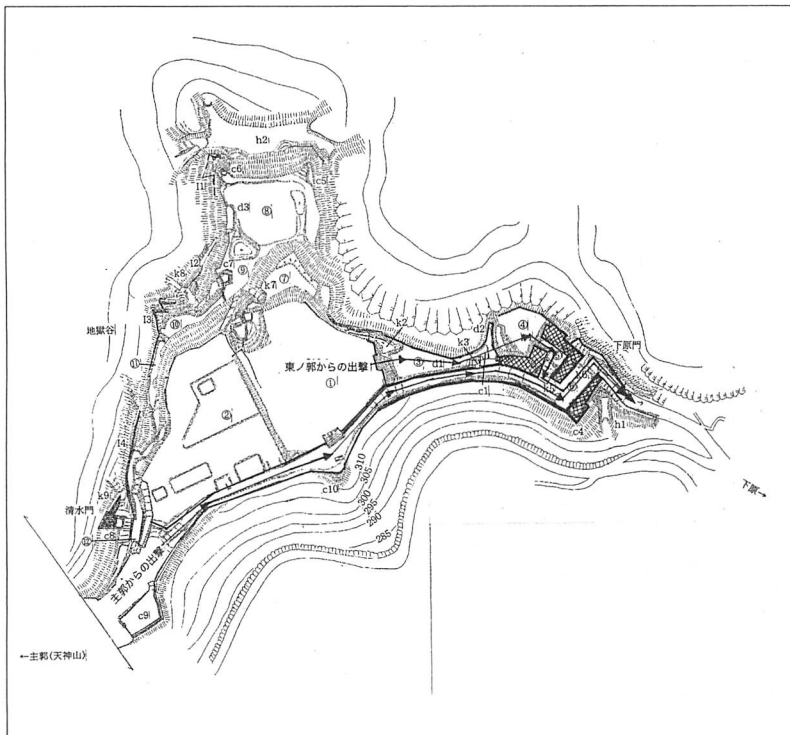


図3-2 下原門の虎口プランについて

主郭を介さず単体で防御する空間が創出された。
 東ノ郭は戦国期志賀氏段階の岡城を改修した部分にあたる「図3-1」。周囲が崖になっている豊後岡城の中で比較的登坂が容易な下原からの登り口にあたる。当初は、東ノ郭は摂津国衆の田近氏を出自とする筆頭家老中川平右衛門長祐(六千石)が預り曲輪内に屋敷を構えた。当主の秀成は長祐に屋敷前通り(城道)も手勢で守るように命じており(6、

東ノ郭から下原門、及び城道を含む豊後岡城東部分の守備を一任している。

豊臣系新興大名が築いた近世城郭では、東ノ郭のように地形の制約から下位曲輪が主郭と同等の高さに並列する事例は、長い稜線上に城域を広げた岸嶽城(佐賀県唐津市)などでみられる⁷⁾。しかし、その場合でも、曲輪の外側に向けて強固な土塁を構えるなど、下位曲輪を明確に第二郭として整備する。

これに対して、豊後岡城の場合、下原門をみると、主郭(天神山)から東ノ郭の脇を通る城道が形成する二折れの外柵形虎口と、東ノ郭から尾根伝いに連なる曲輪を起点とする三連続の外柵形虎口が合体する複雑な虎口プランとなっている[図3-2]。また、東ノ郭とそれに続く曲輪が常に主郭(天神山)から通じる城道に横矢を掛ける位置にあり、主郭(天神山)の城道の守備も担っていたことがわかる。即ち、豊後岡城の縄張りでは主郭(天神山)と東ノ郭が機能的には並立した関係にある。主郭(天神山)に対して東ノ郭は一城別郭の関係だったことがわかる。

豊臣系新興大名の築いた近世城郭では、東ノ郭のように半ば自立して機能する別郭は、豊前小倉城(細川氏)の松井氏屋敷がある程度である。さらに、主郭(天神山)と東ノ郭からの二つの外柵形虎口が合体する下原門の独特な虎口プランは豊後岡城にしか確認できない。

この下原門の虎口プランを踏まえた上で前掲の「中川家御年譜」の記述に着目すると、豊後岡城の防御上重要な位置を占める東部分は東ノ郭の筆頭家老中川平右衛門の管轄下にあったと考えられる。筆頭家老の中川(田近)氏が中川氏当主に匹敵する勢力を以て、家中において大きな地位を保持していたことが見て取れる。

豊後岡城は一城別郭的な戦国期城郭の様相を内部に抱えつつ織豊系縄

張り技術を駆使した、全国的にみても特異な縄張り構造の近世城郭と位置づけられる。このような性格を確認した上で、城外にある「鬼ヶ城」「木戸の城」と呼ばれる土分屋敷について次に検証していきたい。

二、事例の検討

1、上角櫓屋敷(上角鬼ヶ城)(上角)

まず、上角鬼ヶ城(当初は上角鬼ヶ城御要害、後に上角櫓屋敷。以下、上角櫓屋敷で統一)について検討を加える。

上角櫓屋敷は、豊後岡城から上角台地に沿って西方に一・二キロ離れた台地の突端部に築かれた。西方の渡河点だった阿蔵口から上角台地を登りついた茶屋の辻(登城道と竹田城下へ分岐する)の上方に位置する。

藩政時代に編纂された「諸士系譜」の池田氏家譜では、一五九四(文祿三)年に池田長政が中川秀成から「上角鬼ヶ城御要害」(上角櫓屋敷)を拝領し、与力二〇人(四〇〇石分)と共に七〇〇石格で入ったとある。子の亀右衛門政房も上角櫓屋敷と与力二〇人を継承する。政房は島原の乱でも功績を上げるなど活躍したが、一六四二(寛永一九)年に死去する。政房の没後、子の尚政は上角櫓屋敷から転居し、代わりに与力二〇人分と共に下石氏が七〇〇石格で屋敷を与えられ、幕末まで屋敷を構える。よって、後に櫓場を記した覚書では「下石勘右衛門屋敷」とある⁸⁾。

現在、上角櫓屋敷跡の敷地は上水道の敷地となり中央に給水塔が建てられている⁹⁾。幸いなことに屋敷の墨線にある櫓台や石垣は良好に残されており、一見すると城郭跡と見まがうような大ぶりの石垣を今日まで伝えている。

上角櫓屋敷の縄張り[図4-1]は方形の単郭構造となっている。敷

東・西面が一段高く石塁が配されている。北西隅はさらにもう一段高くL字状の櫓台が構えられた。北西隅櫓台と北東隅は算木積みで処理されている。南西側の石垣壁には横矢掛りがみられる。北西隅の櫓台は稜線に向けて配置されており尾根筋

地の周囲は切り立った崖で比高差も大きい。その上に総石垣の曲輪による方形居館となっている。南東隅が張り出して門構えを成す。門は直角に折れた喰い違い虎口となっている。現在は給水塔への作業道が貫通しているが、藩政時代の絵図をみると虎口から出た城道は東に折れて与力屋敷の通りとなり、台地上を本城まで通じる道となっていた。

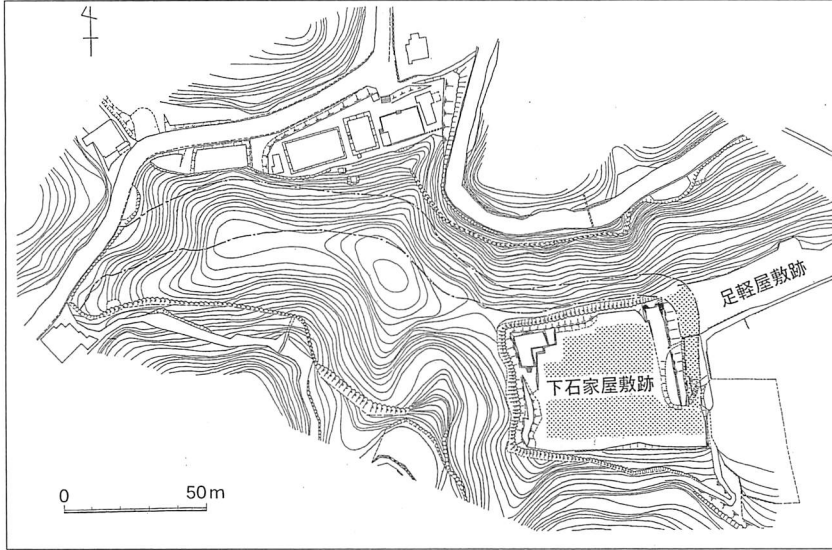


図4-1 上角櫓屋敷(下石家屋敷跡)測量図
竹田市教育委員会『下石家屋敷跡・下石家東足軽屋敷跡』(2000年)より転載

を踏まえて「諸士系譜」の記述をみると、元和一國一城令の後に上角鬼ヶ城の表記が上角櫓屋敷と改められたように、慶長期は要害Ⅱ支城として

に向けて牽制する。また、北東隅の櫓台と合わせて北側に対する防衛の意識が強く、攻め手の侵入に対して迎撃した上で南東隅の喰い違い虎口から押し出して反撃する意図を読み取ることができる。突出した軍事性と積極的な防衛を施した上角櫓屋敷は登城道と竹田城下への分岐点となる茶屋の辻を上方から抑える橋頭堡として機能したと評価できる。



図4-2 《豊後直入郡岡城絵図》の上角櫓屋敷
内閣文庫【諸国城郭絵図】(国立公文書館蔵)から部分拡大

認識されていたことが窺える。また、正保年間の《豊後国直入郡岡城絵図》〔図4-1-2〕にも城外ながら屋敷地に櫓台と石垣列が描かれており現存する遺構と大きな変化がなかった可能性が高い。破却などは行わず、要害を櫓屋敷と読み替えて対応したものと考えられる¹⁰⁾。

この他、東側に隣接して与力屋敷や士分屋敷が並ぶことから、上角櫓屋敷と与力屋敷、士分屋敷がセット関係でまとまった単位で集住していた点も注目される。本城から一・二キロ離れた上角台地の先端に、支城のようにひとつの軍団単位として配置されたことが見て取れる。上角櫓屋敷が本城の影響下に置かれながらも自立した別郭として機能したことがわかる。

この出城を預った池田長政は三〇〇石の石高を持ち鉄砲頭と中川方の先陣を務めた上級家臣である。諸士系譜では池田氏は赤松氏の支流を称すが摂津守護代池田氏の支流だったとみられる。政久（長政父）が三好氏被官から中川清秀のもとに参画したとある。長政のおぼは中川淵兵衛重継（清秀弟、高山氏を継承）室となるなど中川氏と密接な関係を築いている。長政自身も清秀の旗本衆に属し秀政・秀成・久盛の三代に仕えた。豊後入部の際には「御旗本先手」を担い、入部後の屋敷割りで上角櫓屋敷を拝領している。

上角櫓屋敷の立地する茶屋の辻は上角台地の先端にあり、ここを失うと台地を本城まで直到されると共に、竹田城下や鷹匠町・杣谷・久戸谷などの谷あいの士分屋敷も上方から制圧される。それ故、防衛上極めて重要な地点となる。

中川氏は上角櫓屋敷に千石クラスの老職といった大身家臣ではなく、数百石クラスの当主直属の部将を配して預らせている。まとまった軍団を担うものの独立性の高い老職クラスに預けるのではなく、秀成の旗本

衆を担い中川氏と関係の深い上級家臣に与力をつけて預けた点が注目される。また長政自身は摂津国守護代の支流であり、当初は中川氏と同盟関係にあった国衆とみられる。池田氏は、田近氏や熊田氏ら摂津国衆を出自とする中川家老職からみても相当の地位を有した。中川氏が姻戚関係を通して被官化したかつての同盟勢力である。それ故に、前衛の重要な地点を任せるそれ相応の上級家臣として池田氏を配置したものと考えられる。

2、村上氏屋敷（木戸の城）

次に、村上氏屋敷（当初は木戸の城。以下、村上氏屋敷）について検討を加える。

村上氏屋敷は豊後岡城の近戸門から伸びる稜線の先端に位置する。近戸門から分かれた城道が尾根伝いに走り村上氏屋敷の脇をつづら折れで麓へ下りる。屋敷は稲葉川に面した近戸口の上方にあり、七里橋を抑える立地にある。

「諸士系譜」村上氏家譜では、村上氏は越後国を出自とする。村上太郎兵衛は摂津国の国衆伊丹氏に属し伊丹氏を称する。伊丹氏没落後に荒木村重を経て、天正年間に中川清秀に従ったとある。

豊後入部時には村上太郎兵衛は野尻傳兵衛と共に鉄砲頭として先手を担った。そして、豊後岡城の普請に際して新たに切開いた近戸口（近戸門）の「御普請警衛」を中川秀成から野尻氏と共に命じられている。両氏は近戸口に与力二〇人（四〇〇石分）と共に屋敷を構えた。太郎兵衛は三六〇石に与力分を併せて七六〇石格として入る。この時拝領した屋敷については、野尻氏家譜では「要害之屋敷」、村上氏家譜では「御矢倉場見立居宅」とある¹¹⁾。

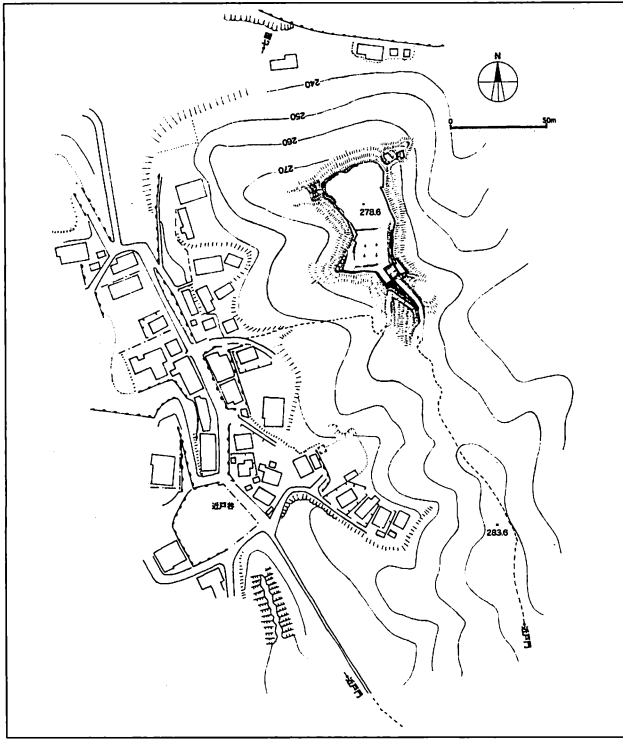


図5 村上氏屋敷(木戸の城)縄張り図 中西義昌：調査作図

天明期の絵図をみると、近戸口を挟んで東側の稜線上に村上氏屋敷があり、西側の高台(現在、旧竹田小学校体育館)に野尻氏屋敷がある。入部当初に命じられた「近戸口御普請警固」が稲葉川に面した谷の入り口を守る役割であったことがわかる。今日、野尻氏屋敷は大きく改変されたが、村上氏屋敷は今日も良好な状態で残る。

村上氏屋敷の縄張り「図5」をみると、地形に沿った不整形な形状ながらも単郭構造となっている。中央に石列があり敷地は南北に二分する。曲輪の塁線は切り立った急斜面に石垣普請を行い細かな横矢掛かりもみられる。但し、河川に面した北側から北西角にかけては石垣がみられない。おそらく河川に面した部分は近代に石垣が抜かれた可能性が高い。

一方、北東隅には一段下がって方形の石積み基壇が確認される。この基壇が櫓場と推察される。

屋敷の南側と西側に虎口を構えた。西側の虎口は土塁で形成された平入り虎口であり、正面に土塁と虎口受けがみられる。西側の尾根筋に向けて開口部が設定されている。これに対して、南側虎口は総石垣の櫓台を備えた両袖枳形となっている。全体に地形に沿って石垣を連ねる縄張りの中で、この部分だけ直線的な高石垣による巨大な両袖枳形虎口が組み込まれている。村上氏屋敷の中で技術的に突出した様相を示す。この虎口は近戸門から尾根伝いに続く城道に直面して構えられると共に、麓から城道を登る攻め手に対して櫓台から厳しく横矢を掛ける位置にある。巨大な両袖枳形が近戸門からの尾根筋と城道を牽制する役割を期待されたことが見て取れる。

なお、村上氏屋敷の脇を通る城道はそのまま尾根伝いに近戸門直下の七曲がり到達する。そこで、近戸口からの登城道と愛宕谷や願成院山を経由した城道と合流する。村上氏屋敷は近戸谷と愛宕谷を分ける稜線の先端に位置し、両方の谷からと稜線上の三つのルートを牽制する役割を担ったものと考えられる。

以上、村上氏屋敷について縄張りからみた場合、単なる土分屋敷とは言いがたい構造をしていたことがわかる。上角櫓屋敷同様に、要害の地を占めて防御を施した出城であると位置づけられる。そうした遺構の評価を踏まえた場合、後世の編纂史料「豊後古人語集」にある「…是大友の時代此口にて木戸の城と喝て一方の要害に用たる所と云…」と興味深い記述が注目される¹²⁾。編纂史料故に慎重に扱う必要があるが、村上氏屋敷の縄張り構造と照合することで、豊後岡城の大改修に際して、秀成は尾根の先端にある既存の木戸の城を改修し、近戸口の出城に取立てた

ものと考えられる。

上角櫓屋敷（鬼ヶ城）を当主直属で先手を率いた池田長政に預けたことと同様に、秀成は木戸の城も当主直属の鉄砲頭である村上太郎兵衛に与力をつけて預けている。木戸の城の位置も、ここを失うと近戸門攻めの格好の足場を与え直到される重要な地点である。そうした地に独立した軍団を持つ老職クラスではなく直属の部将を配置したことは上角櫓屋敷と共通する。村上太郎兵衛も池田長政と同じく摂津国以来の中川氏と同盟関係を有した勢力と考えられる。村上氏も家中における立場を反映する形で近戸門警固の出城を任されたものとみられる¹³⁾。

三、考察

以上のように、志賀氏時代から豊後岡城の出城として使用されたと伝わる上角櫓屋敷（鬼ヶ城）と村上氏屋敷（木戸の城）について、実際に現地を踏査し縄張りを検証した結果、単なる士分屋敷ではなく、文禄年間に入部した中川氏により織豊系縄張り技術と石垣普請で改修を受けた出城と位置づけることができた。

上角櫓屋敷と村上氏屋敷について以下のよう要点が整理できる。

◎上角櫓屋敷と村上氏屋敷は、豊後岡城から伸びる台地の突端部に位置する。それぞれ、阿蔵口と近戸口の登り口を押える橋頭堡として機能した。登り口を押える遠構えの役割を担った志賀氏時代の段階から、石垣造りによる技巧的な縄張り技術が施され、前方で積極的に防御する出城として整備されたことがわかる。

◎上角櫓屋敷と村上氏屋敷は共に単郭構造であるが、墨線を石垣で固め、開口部に喰い違い虎口や両袖枳形といった織豊系城郭特有の軍事的に秀

でた虎口プランを採用する。

なお、豊後岡城の周辺にある士分屋敷は立地条件から石垣墨線を持ち城門のような門構えを持つものが散見されるが、屋敷単位で完結した防御を意図した縄張りになっていない。それらと比べた場合、上角櫓屋敷と村上氏屋敷はそれ自身が独立した防御機能を有した出城であり、明らかに軍事的に抜きん出た存在と評価できる。

◎豊後岡城を近世城郭に改修した中川秀成は、城外の二つの出城（上角櫓屋敷と村上氏屋敷）に池田長政や村上太郎兵衛といった数百石クラスの上級家臣を配置した。彼らは旗本先手や鉄砲頭など藩主直属の備えを形成した部将である。また、それぞれ中川氏と同等に近い出自を有した立場で、清秀（秀成の父）と同盟関係を媒介に帰属した勢力である。独立した軍団を統括する数千石の老職クラスではなく、摂津国時代は当主や老職に続く地位を有した上級家臣を充てることで、軍事的に重要な要衝を直轄しようとする当主側の意識を見ることができるといえる。

◎加えて、池田氏も村上氏も与力二〇人を宛てられることで身代の倍に近い格（待遇）を与えられている。与力分を加算することで出城の預主として老職クラスに引けを取らない地位を確保すると共に、中川氏にとっては以前の同盟勢力に対する配慮も見て取れる。

これらの要点から、上角櫓屋敷と村上氏屋敷の設置には共通した特徴が確認される。上角櫓屋敷と村上氏屋敷はそれぞれ自立して機能すると同時に、本城を起点として台地全体の防御体制の一角として機能したことがわかる。これに、豊後岡城の縄張り構造において突出した東ノ郭のあり方を鑑みると、それ自体堅固な近世城郭として機能する主郭（天神山）を核として、もつとも登り口になりやすい東側の下原方面には東ノ郭を配して筆頭家老の中川（田近）氏の軍団に任せ、西側に大身家臣が

集住した三の丸的役割を果たす西方外曲輪の外郭ラインを配置する。西方外曲輪から伸びる尾根のさらに先端に出城として上角櫓屋敷と村上氏屋敷を配置することで、豊後岡城のみならず、城外の上角台地の登り口から防衛する意識が明確に読み取れる。

近世城郭では、主郭(本丸)を中心とする求心的な縄張りを持つ巨大な本城の中で戦闘態勢を編成するのが一般的である。そういった視点からは豊後岡城の相対的に広い範囲に軍団配置を常態化させた防衛体制は戦国期か旧族大名のような分散型配置にみえるかもしれない。しかしながら、豊後岡城と東ノ郭、上角櫓屋敷・村上氏屋敷の立地と縄張りから、主郭を頂点とする求心性を保ちつつ各軍団が広範囲に持ち場を構えた戦時に近い極めて実戦色の強い態勢となっていたと評価される。この配置を基本として上角台地に沿って谷あいなどに士分屋敷地が配置されており、当初の軍団配置がそのまま城内・城下の体制として編成されたものと考えられる。

堅固な高石垣と織豊系縄張り技術が施された豊後岡城と実戦的な配置が成された上角台地(城下)のあり方から、入部当初の領内支配に対する中川氏の並々ならぬ意識を窺うことができる。加えて、一城別郭の東ノ郭と城外に配置された上角櫓屋敷・村上氏屋敷の存在から、膝下に形成された竹田城下(即ち、竹田町や鷹匠町、十川町など)がこの過剰な戦闘態勢下の駐屯を支える役割として町立てされたことが明らかである。

また、城郭史の視点からは、織豊系城郭の理念を色濃く持った近世城郭において城外に近接してそれ自体が独立した単位で機能する出城を持つ事例は管見の限りみられない。米子城や津和野城など一城別郭として機能する独立した「出丸」の事例や、一部の旧族大名に分散した曲輪配置を持つ辺境型事例がみられるが、それらの事例と比べても、豊後岡

城は本城から離れた城外の突端部に独立した出城が構える点で明らかに異なる。上角櫓屋敷と村上氏屋敷は全国的にみても極めて貴重な近世城郭に付随した出城の遺跡であることを指摘しておきたい。

終わりに

豊後岡城については、織豊系城郭の流れを汲む近世城郭であると共に、主郭(天神山)と東ノ郭が一城別郭の関係にある特徴的な縄張りを持つことと、その特徴が下原門の特異な虎口プランにみられることをこれまで指摘してきた。本論では、これに加えて、城外においても近接して出城を構えるなど豊後岡城とその城下が全国的にみても特異な景観を創出していたことを明らかにした。近年、城郭跡の整備を目指した調査は各地で行われているが、城郭跡と周囲の景観を考える上で縄張り研究に基づく城館史料学の視点が欠かせないことを改めて示せたと思われる¹⁴⁾。城郭跡及び城下町の調査や整備・保全において、このような城館史料学による成果に真摯に耳を傾ける姿勢を期待して止まない。

最後に、今後の課題について言及しておきたい。

藩政時代に編纂された「中川氏御年譜」などに収録された覚書をみると、上角鬼ヶ城と村上氏屋敷の二つの出城以外にも、城外に櫓場(櫓屋敷・要害)が設定されたことがわかる。

岡藩の櫓場については、文献史料や絵図等から確認することができる。文献史料では「岡城中櫓場城外櫓場之覚」が確認される。一七九九(寛政十一)年八月に記したものとあり、櫓場の持ち主は一八世紀中・後期の人名や官途名で記されている¹⁵⁾。一方、絵図では一八世紀半ばの《御府内御守衛之図》がある¹⁶⁾。

二つの出城を含むこれらの櫓場の現地比定と遺構の確認を行い、相互比較や分布状況を検証することで、豊後岡城と上角台地、竹田城下の構造について考察を行う必要がある。それらの成果を踏まえた上で、全国にも珍しい本城と城下の集住形態を創出した中川氏とその家中の性格、及び城郭・城下経営からの藩政研究を城館史料学の視点に立って総合的に進めることが期待される。

(丁)

補註

- (1) 拙稿「豊後直入郡岡城の縄張り構造」(一九九九年日本建築学会九州支部研究報告書)「日本建築学会、一九九九年」、同「縄張り調査と城郭跡の資料的活用」豊後岡城東ノ郭の縄張り調査を通して(別府大学史学研究会『史学論叢』三八、二〇〇八年)
- (2) 九州では木島孝之氏の諸研究が挙げられる。木島孝之「城郭の縄張り構造と大名権力」(九州大学出版会、二〇〇二年)、木島孝之「筑前立花山城が語る朝鮮出兵への道程—小早川隆景による立花山城の大改修の実態とその史的意味—」(城館史料学会『城館史料学』創刊号、二〇〇三年)
- (3) 岡藩関係の編纂史料では、藩が編纂した「中川氏御年譜(年譜・附録・別録)」(個人蔵、竹田市教育委員会『中川氏御年譜』(二〇〇七年に収録)や中川(古田)氏の老職、中川幻間による「中川氏御先祖并御一門覚書」(「金城秘鑑」(七))大分県立図書館複写本、所収)がある。その他、田北鎮義「豊岡古人語集(古人語傳聞書)」(古庄九陽寫「豊岡古人語集」大分県立図書館複写本、所収)や「両郡古談」(前田多三郎編『両郡古談』「九阜書院、一九三四年」)などがある。
- (4) 豊後岡城・城下の絵図としては、正保年間の様子を描いた(豊後直入郡岡城絵図)内閣文庫「諸国城郭絵図」(国立公文書館蔵)が最も古い。寛文年間の豊後岡城・城下の様相を示した(城中より各屋敷への道筋)(竹田市立図書館蔵)がそれに続く。その他、一七八七(天明七)年の(岡城城下家中図)(竹田市立図書館蔵)がある。なお、後者二図は「岡城絵図資料編」(竹田市教育委員会、一九九一年)に分割写真で収録されている。
- (5) 註(1)拙稿を参照されたい。
- (6) 「中川家御年譜第三」(豊後岡藩中川家文書)「竹田市教育委員会、二〇〇七年」
- (7) 岸嶽城については、木島孝之「唐津焼創始時期—一五八〇年代説—」を問う—岸嶽城の縄張り構造の解明を通して—「黒田慶一編『韓国の倭城と壬辰倭乱』(岩田書院、二〇〇四年)」を参照されたい。
- (8) 「諸土系譜」(豊後岡藩中川家文書)竹田市立歴史資料館保管
- (9) 屋敷内の敷地部分と虎口、東側の足軽屋敷跡部分は発掘調査が行われている。竹田市教育委員会「下石家屋敷跡・下石家東足軽屋敷跡」(二〇〇〇年)を参照されたい。
- (10) 近年、元和の城割令については、城割令を発した幕府側自体にも実際にどこまで破城するのか明確な基準がなく、各大名により作事物の解体から石垣部分の破却まで法令に対する対応がまちまちだったことが指摘されている(木島二〇〇一)。主たる目的が大名家への統制ではなく大封大名の支城網の整理にあったと考えられている。その観点からすると、上角鬼ヶ城御要害から上角櫓屋敷に名称を変更した一方で、遺構の改変や施設の取り壊しなどの形跡がみられない点は注目される事例と言える。
- (11) 「諸土系譜」(豊後岡藩中川家文書)竹田市立歴史資料館保管
- (12) 田北鎮義「豊岡古人語集(古人語傳聞書)」(古庄九陽寫「豊岡古人語集」

大分県立図書館福写本、所収)

- (13) なお、後世の編纂史料としては、藩の編纂による「中川御年譜」より質の落ちる「豊後古人語集」を用いているが、実際の遺構からの見地をもとに、近戸口を切開いた際に既存の「木戸の城」を改修し城外に出城を構えたことを示す有効な記述として再評価することができる。城館史料学による手法の有効性のひとつとして指摘しておきたい。

- (14) 拙稿「中・近世城郭の構造分析と城郭跡の保存・整備―城館史料学の視点から―」(『日本歴史』二〇一一年一月号、二〇一一年)

- (15) 「中川家御年譜附録第三」(『豊後岡藩中川家文書』「竹田市教育委員会、二〇〇七年」)に収録。

- (16) 一七四六(延享三)年成立。城内・城外の非常時における守備配置を図化した絵図、竹田市立図書館蔵。

〔追記〕本論の村上氏屋敷(木戸の城)調査では、別府大学大学院須藤端氏の協力を賜った。末尾ながら感謝いたします。また、私事ながら、二〇一〇年度後期に別府大学大学院にて「城館史料学概論」の講義をさせていただく機会を得た。歴史学や考古・文化財学を標榜する大学は今日多くあるが、発掘調査による先史・古代の遺跡調査が中心であり、中・近世史研究に不可欠な城郭跡の調査手法や研究視点について学ぶ機会はほとんどないのが現実である。そうした中で、講義をする機会にご尽力いただいた白峰旬別府大学教授の学恩に末尾ながら感謝いたします。